

企画展示「香港の新聞『大公報』とその周辺Ⅱ」を担当して

社会学部社会調査学科 教授 芹澤 知 広

奈良大学図書館の企画展示「香港の新聞『大公報』とその周辺Ⅱ」（2012年12月12日～2013年3月20日、奈良大学図書館展示室）が行われた経緯と展示資料に関わる情報を、この機会に記しておきたい。

1. 香港の新聞『大公報』について

本企画展示に先立ち、奈良大学図書館では、企画展示「香港の新聞『大公報』とその周辺」（2009年10月10日～2010年1月31日、奈良大学図書館展示室）が行われた。この時には、筆者を介して奈良大学図書館に寄贈された、香港の新聞『大公報』の1959年から81年にかけての新聞原紙を中心に、1960年代から70年代にかけての香港の社会に関わる写真や書籍を展示した。（企画展示「香港の新聞『大公報』とその周辺」については、『みささぎ』第8号、2009年12月刊、所載の拙文をご覧ください。）

その後、奈良大学図書館は、平成22年度の特別集書として、『大公報 全164冊 1902. 6-1949. 1』を購入した。これは、中国の共産主義革命以前に天津（1937年8月以降は漢口）で刊行されていた『大公報』を近年中国国内で影印復刻したものである。現在の『大公報』は、香港で1948年に復刊され、今日まで香港で発行されているものであるから、ちょうど年代的に本学のコレクションを補完する資料となっている。

いっぽうで、この『大公報』の影印復刻版は、香港の『大公報』の前史として重要であるばかりではなく、近現代中国史の教育研究上の資料としても、きわめて重要である。初期の『大公報』の教育関係記事の一覧を作成している歴史学者、朱鵬の研究によると、『大公報』は、1つには、20世紀初頭の中国の憲政運動の過程を知るうえでの必須資料であり、2つには、清朝末期の教育史の重要な資料であり、3つには、百年以上の歴史をもつ唯一の全国紙として中国近現代史の様々な分野の貴重な記録を含む資料であり、4つには、天津の地方史研究にとって重要な資料である（朱鵬「『大公報』創刊初期教育関係記事一覧（1902年

6月24日-1903年5月28日）」『中国文化研究』第22号、2006年、119-135頁）。

1902年に天津で創刊された当時の『大公報』の紙面について、本展示でも復刻版の該当ページを開いて示すことで展覧に供したが、「大公報」という紙名のロゴタイプは、香港の街中で現在売られている『大公報』のロゴタイプとまったく同じである。政治情勢のなかで幾度か停刊せざるをえなかった時期があるが、20世紀初頭の天津から今世紀の香港にまで引き継がれている全国紙として、『大公報』はきわめて特別な、香港の、そして中国の新聞であることを、本稿でもあらためて強調しておきたい。

2. 1972年の日中国交正常化について

本企画展示の準備は、2012年の秋に行った。2012年は日中国交正常化40周年にあたっていたため、1972年の日中国交正常化に関する『大公報』の記事を展示するというアイデアを筆者は早くから持っていた。なお、同じころ奈良大学の学生たちとともに訪れた神戸華僑歴史博物館でも、同じアイデアで新聞の展示を行っていた。

しかしながら、日本政府による尖閣諸島の土地の国有化に対する中国政府の抗議行動に端を発して、日中国交正常化40周年の行事が中止されることも決まり、様々な場面で日本と中国とのあいだ、日本人と中国人とのあいだの交流が、突然「ギクシャク」するような事態に至った。筆者は、かえって日中国交正常化の時代について今展示することに大きな意味が与えられたような気がして、その時期の『大公報』をめくって意気盛んに読み進めたところ、意外にも考古学の記事が多いことに気がついた。

1972年は、日本と中国の双方で考古学上の大発見の年にあたっていた。日本では、奈良県明日香村の高松塚古墳の壁画の発見であり、中国では、湖南省長沙市の馬王堆漢墓の発掘である。考古学や歴史の研究を得意とする奈良大学の図書館には、当然のことながら、高松塚古墳や馬王堆漢墓の書籍も多く所蔵されている。しかし今回筆者

は、実家の書棚にある『中華人民共和国出土文物展図録』（東京、朝日新聞東京本社企画部、1973年刊）を持ってきて展示することにした。この展覧会の会期と場所は、1973年6月9日から7月29日までが東京国立博物館、8月11日から9月30日までが京都国立博物館である。筆者は両親に連れられて奈良から京都へ行き、何か大きなものを会場で見た記憶が確かにあるが、見たものが何だったのかについては、残念ながらよく覚えていない。

日中国交正常化のニュースが多く報道されている1972年9月の『大公報』の紙面には、『考古新発見』という馬王堆漢墓発掘の記録映画の広告が連日掲載されている。ちょうど中秋節の時期にあたり、「天上中秋月圓、人間出現奇跡」（「天界に中秋の満月、人間界には奇跡が起きている」）という広告文や、「先睹為快、遅睨執輪」（「先に見ないと負け」、「睨」は広東語で「看」（見る）を指す語）という広告文が躍っている。同じころの『大公報』に、馬王堆漢墓を訪れた朝日新聞記者の記事の翻訳や、高松塚古墳に言及した考古学のコラムが載っているのも楽しい。

『大公報』は、香港社会のなかで左派（中華人民共和国支持派）を代表する新聞であり、中国本土のニュースが多いため、日中国交正常化が大きく取り上げられていると想像したのだが、紙面を調べると、はたしてそのとおりであった。筆者は続けて、中国から日本へのパンダの寄贈（1972年10月に上野動物園にカンカンとランランが来たこと）についての記事を調べたのだが、このニュースは香港の住民にとって重要ではないためか、見つけることができなかった。

3. 天津の『大公報』の社屋について

1902年に天津で『大公報』を創刊した英斂之は、北京のカトリック教会のフランス人主教や中国駐在フランス大使からも資金援助を得ていたため、当初フランス租界に社屋を設けた。1902年6月7日の創刊号では、「本館開設天津法租界」としか書かれていないが、その後の新聞には、「本館開設天津法界得律風三百二十三」と書かれてある。

そして、日露戦争後の英斂之の日本最良が災いし、『大公報』はフランス租界を追われ、その社屋は1906年に日本租界へと移る。この英斂之の日本への傾斜と社屋の移転については、本企画展示に出展した清国駐屯軍司令部編『天津誌』（東京、博文館、1909年刊、奈良大学図書館蔵）の538-539頁の記述からもわかる。

1906年9月4日付の『大公報』には、「日本租界四面鐘対過新館」とあり、1931年11月16日付で再度フランス租界へ移るにあたっては、「本館向設日租界旭街廿七號」とあって、1906年から31年にかけて、日本租界の旭町27番地に『大公報』の社屋があったことがわかる。

本企画展示の準備にあたっては、森田憲司館長の個人所蔵品から、『大公報』の創刊年である1902年に大阪で発行された「清国天津新地図」（壁面ケースに額に入れて展示）をはじめ、多くの天津に関係する地図と書籍をお借りした。第一ケースに展示した、森田館長所蔵の「天津日本租界図」（天津、日光堂書店発行、1940年）に出てくる「旭27」が、おそらくは『大公報』の社屋があった「旭街廿七號」にあたると考えられる。近くの「旭19」には「京津日日」という標示もあり、北京と天津で出されていた主要な日本語新聞である

「京津日日新聞」の社屋も、このメインストリートにあったことがわかる。

重慶市人民政府新聞弁公室が設けている「重慶大公網」というインターネット新聞のサイトに載った記事「大公報与天津百載淵源」（2009年8月11日）によると（URL：<http://cq.takungpao.com/content.asp?id=20470> 2013年2月5日参照）、現在の「和平路169号」にある建築物が、天津市内唯一の『大公報』の遺跡だという。1906年に建てられた日本建築とあるから、日本租界旭街の社屋にまちがいない。筆者は未だ天津に赴く機会に恵まれてはいないが、近いうちに現地で確かめ



香港島、ヘネシー・ロード（軒尼詩道）の『大公報』旧社屋ビルに今も残る、
「大公報」のロゴタイプの看板（2012年4月、筆者撮影）

てみるつもりである。

4. 香港の『大公報』の社屋について

3年前の企画展示では、日本人と香港との関わりについて、1つの展示ケースをあてて、多くの書籍を紹介した。しかし今回は、書籍を多くは展示せず、天津についての展示ケースと同様、地図を展示したいと考えていた。たまたま筆者は1年以上も前、日本の古書店の目録に1960年代の香港島、九龍半島、新界地区の地図を見つけ、購入していたことから、これらの地図を展示することにした。しかし、地図を広げると、かなり展示スペースを取るため、『大公報』の旧社屋と現社屋がある香港島の地図のみを広げ、九龍半島と新界地区の地図については、畳まれたままの状態と並べた。

この1960年代の香港島の地図を、奈良大学図書館が所蔵する2010年代の香港の地図と比べてみた。ヴィクトリア港の埋め立てが進み、香港島の北の沿岸部に土地が増えていることがわかる。戦後の香港の歴史は、中国本土からの難民によって人口が増え、その人口を収容するための住宅地を開発する歴史でもある。そして、その人口の喉を潤し、彼らが働き手となった工場を動かすための水を確保することも、大きな課題であった。

今回の企画展示では、香港に関する日本語の著作を1点だけ展示した。それは、香港のダム建設に関わった日本人についてのノンフィクション・ノベル、木本正次著『香港の水 日本人の記録』（東京、講談社、1967年刊）の帯付の初版本である。近年の空港建設や橋梁建設を含め、戦後香港の開発には日本のゼネコンが大きく貢献している。1960年代に『大公報』の社屋があったワンチャイ（湾仔）は、戦前は日本人が多く住み、商店を出した場所だった。また、その東のコーズウェイベイ（銅鑼湾）は、1960年代の「DAI MARU 大丸百貨公司」（当時の地図には見えるが、今は閉店している）の出店を皮切りに、日本のデパートが進出し、日本文化の発信地となった場所である。この地区の発展を細かく見ていくことから、日本と香港の交流史を描くことができそうだ。

本企画展示では、展示ケースに収まる範囲で、『大公報』と天津、香港に話題を絞った。しかし、20世紀の日本と中国のあいだのさまざまな交流については、紹介すべきことがまだまだたくさんある。そして奈良大学図書館は、そのテーマにふさわしい所蔵資料を多く有している。企画展示を通じて紹介する機会に、今後も恵まれることを期待したい。

明治39年11月5日

文学部史学科 教授 森 田 憲 司
図書館長

2012年の10月から11月の中旬にかけて、図書館の展示室で「碑林全集を見る」というタイトルで展示をおこなった。

今回の展示は、中国陝西省の西安にある碑林博物館に収蔵されている石刻の全てを拓本で図版にした、『西安碑林全集』という大部の本が図書館に入ったのを紹介するために開いた展覧会なのだが、私の趣味をかねた趣向として、「明治時代に碑林を訪れた日本人」というコーナーを設けてみた。ここでは、展示で紹介した日本人のうちで、明治39、40年の西安にかかわった人たちを見てみたい。今から100年以上前のことである。

まず挙げねばならないのは、東京帝国大学の関野の^{せき}貞だ。最近出版された『関野貞日記』（中央公論美術出版）によれば、関野は、明治39年、すなわち1906年の10月28日に西安に入城し、滞在をスタートするが、滞在中の関野は、毎日のように碑林を訪問調査していたことが、日記によって

わかる。

そして、日記によれば、西安滞在中の11月5日に、玄宗皇帝と楊貴妃の物語で有名な華清池^{かせいも}を訪れており、大谷光瑞一行、さらに、「伊犁^{いり}地方へ旅行途次なる陸軍士官某氏」とそこで一緒になっている。後者は中国西方の伊犁への紀行で有名な日野^{ひの}強^{つよし}である（日野の名前は後で紹介する天心の日記にも見える）、彼の旅行記は、『伊犁紀行』として明治42年（1909）に刊行され、戦後には芙蓉書房から復刻されている。関野は、この日の光景について、「一時浴室は日本人の専有となれり」と書く。

華清池に光瑞自身が同席したかどうかは不明だが、11月8、9の両日に、関野は西安城内の^{ぐうきよ}寓居に光瑞を訪ね、日記に「師ハ極メテ平民的^{かっ}ニ且快活ナリ」と印象を書き残している（8日）。

一方、関野の滞在していた期間に、岡倉天心も第2次の西安滞在中だった。天心にも日誌があ

り、11月20日に入城し、12月5日に出発していることがわかる（全集第5巻「支那旅行日誌」）。天心は西安城東門外の八仙庵に滞在していた。八仙庵は、1900年の八か国連合軍北京侵攻の際に西安へ逃れた西太后が住んだお寺として有名だが、今も参拝客を集めている。

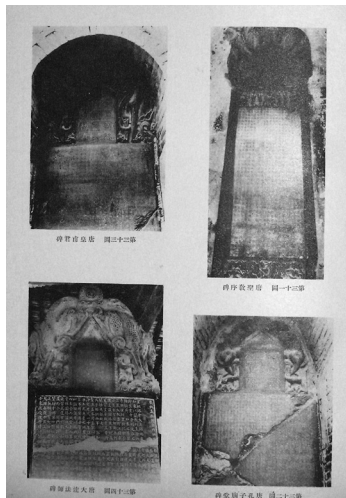
この時の関野の日誌は、惜しいことに西安滞在中の11月11日で終わっていて、天心の名前は見えないが、天心の日誌には、12月2日の箇所に「関根（原文の誤り）氏菅野（謙益）氏と共に来ル、云フ塚本等ヲ挨テ帰朝ス」とあり、3日にも、「関野氏来ル」とあって、この二人が西安で出会っていたことがわかる。

ちなみに、この「塚本」とは、塚本靖のことで、彼も東京帝大の建築史の教授である。塚本には単行本の中国旅行記はないが、雑誌に「清国内地旅行談」を連載している。また、東洋美術史家の平子鐸嶺（奈良との関係では、法隆寺論争とのかかわりや『百万塔陀羅尼考証』で有名）も、関野に同行していた。

さぐる範囲をもう少し広げれば、翌1907年には、京都の東洋学の開祖の一人、桑原隲蔵が西安を訪れ、20日あまり滞在する。こちらの旅行記は、『考史遊記』としてまとめられ、1942年に刊行されている（全集第5巻にも所収）。今回の展示にも利用した「大秦景教流行中国碑」の「発見」や碑林への移動、複製の作成の経緯については、そこに詳しい。

一方、欧米人ではフランスの東洋学者シャヴァンヌが、やはり07年に西安を訪れ、石窟寺院や石刻などの調査をしている。このことは、近刊の菊池武夫『義和団事件風雲録』（大修館アジアブックス）に書かれている。

西安に住んで、訪 『支那碑碣形式の変遷』より



れた学者たちをアテンドした日本人もいた。

当時の西安には20名以上の日本人がいたらしい。その代表的な人物が足立喜六で、関根・桑原いずれの日誌にもその名前が見える。彼は西安大学堂の教習であった。足立には現地調査を踏まえた大著『長安史蹟の研究』があるが、これを著すについては桑原の指導を受けたと、その序文に書かれている。

また、関野の日誌には10月29日の箇所に高等学堂訪問の記事があり、この日から高等学堂に寄寓することとなる。この記事には、足立の名前とともに、大谷探検隊で有名な渡辺哲乗の名前も出てくる。天心も「高等学堂ヲ訪フ」と書いているから（11月27日）、足立にも会ったことであろう。

関野の調査の結果は、『支那碑碣形式の変遷』や『支那の建築と芸術』、さらに『支那文化史蹟』に収められた諸編として結実することとなり、桑原の仕事は『考史遊記』だけではなく、いくつもの論考として帰国後に発表され、のちに5巻の全集（他に別巻）にまとめられている。一方、シャヴァンヌは、『T'ung Pao』などの雑誌に現地調査の成果を次々に発表していく。

そして、翌年の1908年には、北京在住の日本人たちによって、評論・情報の同人誌『燕塵』が北京で創刊されており、桑原の動静についても記事がある。すでに北京は、日本人「駐在員」たちにとって、「住む町」になっていた。くわしくは、森田の『北京を見る読む聞く』に書いているので、参照していただきたい。



華清池の発掘風景（1987）

後記

図書館報『みささぎ』第16号をお届けいたします。まず、原稿をご執筆頂きました、芹澤先生・森田先生に心よりお礼申しあげます。

本学図書館は大きな図書館ではありませんが、学生からのニーズに応えるための“購入希望図書”制度を導入しております。その制度の更なる充実と、利用者の皆さまの立場に立ったサービスの充実を行うべく努力してまいります。

『みささぎ』は、次年度も年3回の図書館報の刊行を予定していますので、どうぞお楽しみに。

発行：平成25年3月10日

編集：奈良大学図書館 奈良市山陵町1500